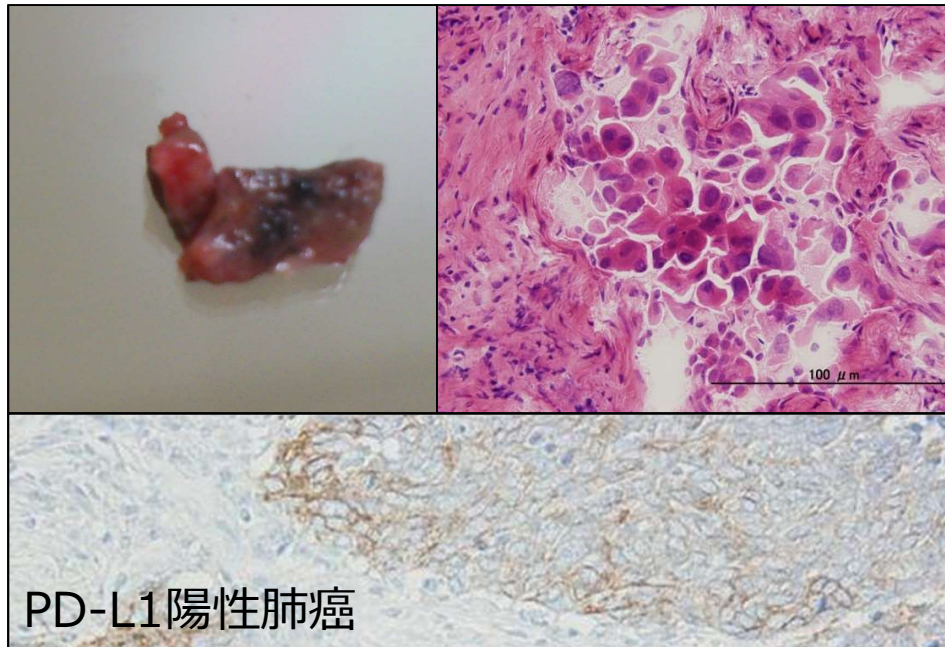


肺癌発症機序の分子メカニズムの解析と新規肺癌治療法の開発

本邦では肺癌の罹患率は依然として高く、根治可能な肺癌治療法の開発が急務です。当科では、臨床検体を出発点とした肺癌治療に向けた治療標的分子の同定を目指すとともに、最近注目を集めております免疫チェックポイント阻害剤にもフォーカスを当て、その治療効果を増大させるような新しい手法の開発研究にも取り組んでいます。

手術により摘出した肺癌検体



肺癌は、年間約6万人以上発症する疾患であり未だ治療法が確立されていません。これまで我々は、肺がんにおけるEGFRの遺伝子増幅や突然変異によるEGFRシグナル亢進が、癌の悪性化に関与していることを見出してきました (*Cancer Res.* 2005, *Int J Cancer.* 2006, *PLoS Med.* 2007, *Cancer Res.* 2008, *Ann Surg Oncol.* 2010)。次世代シーケンサーの発展に伴い、肺癌患者さんが持つゲノム構造も最近明らかになってきた。当科としても独自で臨床検体を元に新規肺癌治療標的分子の探索研究を展開しています。また、免疫チェックポイント阻害剤の標的分子であるPD-L1に着目した研究も推進しています。